

## 小品系般若經の本願説について

### 岸 一 英

小品系般若經において説かれる五つの誓願は『阿闍仏国經』との関連から出てきたものではないかという点を、小品系般若經の内容分析からみていきたいと思う。

五つの誓願が説かれるのは『道行經』恒竭優婆夷品第十六の後半に相当する部分であつて、その内容そのものについてはすでに触れられているので、道行經にあげられる願文のみを要約してあげるならば、次のようになる。

(一) 無有禽獸道

(四) 所願所索飲食自然

(二) 無有盜賊

(五) 無有惡歲疾疫者

(三) 悉得薩芸若八味水

そして、これらの願については、この誓願についての記述のあと

に、この品名にある恒竭優婆夷が星宿劫に金華仏という名の仏になるであろうという授記談が述べられる中で、恒竭優婆夷が阿闍仏土に生れ、さらにさまざまな仏土に生れ變つてのちに仏となつたその世界には、

無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>禽獸、盜賊、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>斷水災、若穀貴、病疫者<sub>一</sub>

となつており、阿闍仏土をはじめとして、さまざまな仏土に生れたのち、金華仏となつたその世界には、この五つの誓願に相応する内容の成就していることを述べているのである。すなわち、小品系般若

若經における五つの誓願とその成就したことは阿闍仏に関連したものとしてみずりあげられているのである。したがつて、この内容自体が『阿闍仏国經』の内容を予想させるものであると考えられるのであり、実際に、その部分を見い出すことができるのである。

すなわち『阿闍仏国經』においては、

(一) 阿闍如来刹中無有三惡道 何等為三、一者泥梨二者禽獸三者辟

落

(四) 其仏刹無<sub>レ</sub>有三病 何等為三 一者風二者寒三者氣

(二) 一切皆無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>衆邪異道<sub>一</sub>か

(四) 其仏刹人民隨<sub>二</sub>所念食<sub>一</sub>即自然在<sub>二</sub>前

(三) 其浴池中有<sub>二</sub>八味水<sub>一</sub>人民衆共用<sub>レ</sub>之

となつており、小品系般若經における五願は『阿闍仏国經』及びその異訳である『不動如来会』の中にも見い出せるのである。

これは、従来は阿闍仏の本願の数え方それ自身についての異説があり、また、今あげた内容の出る阿闍仏土善快品第二の内容を本願と考えず、単なる諸功德のあらわれとして解釈していたことによつて、見落されていたのではないかと考えられるのである。

小品系般若經における阿闍仏に關係する記述は、この誓願についての記述のところで、經典みずから『阿闍仏国經』の内容を語っていると考えられるが、さらにもう二点からこの記述が『阿闍仏国經』から引用されたものであつて、般若經みずからの思想でないことを考察してみたいと思う。

前述のように、恒竭優婆夷が阿闍仏刹に生れ、さらにさまざまな仏土に生れかわつてのち、星宿劫に金華仏になるであろうという授記談の直後における小品系般若經の主題は、『道行經』においては、

須菩提白仏言 菩薩行般若波羅蜜何等為入空 何等為守三昧

となつており、「般若波羅蜜を行じるとき、何を空に入るとなし、何を空三昧を守るとなすのか」ということにはじまり、三三昧つまり空、無相、無願三昧を主題として、それを学び、行じてもそれに墮することなく、途中で、阿羅漢辟支仏の悟りを悟つてしまうことのないことを述べていくものなのである。そして、この三三昧についての問題が突然にあらわれるのは、この五つの誓願と、恒竭優婆夷の授記談の前に、その導入部分ともいうべき表現がなされているのである。つまり、『道行經』の内容でいえば、

舍利弗謂須菩提若有菩薩有三種事向三昧門一者空二者無相三者無願是三者有<sup>レ</sup>益<sup>ニ</sup>於般若波羅蜜<sup>一</sup>

とあつて、この五つの誓願と恒竭優婆夷の内容とを取り除けば全く連絡する一貫した話題となつていくといえるのである。

最後に、小品系般若經における五つの誓願それ自身の発達という観点からみると、六ハラミツが宋施護訳ならびに八千頌梵本においてはじめて、完全に対応させられているのであつて、六ハラミツに五願が対応させられたものでないことに注意しなければならぬのである。『道行經』にはただ布施ハラミツ、忍辱ハラミツの二ハラミツを対応させているだけなのであつて、六ハラミツが完全に配置されるのは、漢訳においては、仏母經のみと八千頌梵本だけなのである。すなわち、五願が、般若經の中にとりいれられ、そしてハラミツを配することによつて般若經化されていった歴史を漢訳諸本を比較することによつて伺いえるのである。すなわち、『道行經』では、

(一)布施檀波羅蜜

(四)精進

小品系般若經の本願説について(岸)

(二)忍辱行辱提波羅蜜 (五)精進 (三)欠

『小品經』では

(一)檀波羅蜜 (四)精進

(二)辱提波羅蜜 (五)精進

(三)精進

『第四会』では、

(一)布施波羅蜜多 (四)精進

(二)布施淨戒・安忍波羅蜜多 (五)精進

(三)精進波羅蜜多

『仏母經』では、

(一)布施波羅蜜多 (四)禪定波羅蜜多

(二)持戒・忍辱波羅蜜多 (五)智慧波羅蜜多

(三)精進波羅蜜多

『八千頌』では、

(一) dānapāramitā

(二) dānapāramitā, śīlapāramitā kṣāntipāramitā

(三) vīrya, vīryapāramitā

(四) dhyanapāramitā (五) prajñāpāramitā

以上のように六ハラミツに五願を対応させたのではなく、五願に順次六ハラミツが対応させられていったものと解釈すべきなのである。したがつて、小品系般若經における本願説が『阿闍世經』の中にみとめられ、また、その記述の前後関係から、さらに、五願の小品系般若經内における発達という三つの観点から、小品系般若經における本願説は、『阿闍世經』の中から導き出されてきたのではないかと考えられるのである。